
【講 義】

装訂について

講師 落合博志（国文学研究資料館教授）

装訂について

—古典籍の装訂とその分類—

国文学研究資料館 落合博志

◎は写本に特有の装訂。

○は版本にもあるが、一般的でない装訂。

*を付した装訂名は仮称。

卷子本の類

卷子本 ○

紙を糊付けして横に繋げて行き、左端に軸を付け、軸を中心にして丸く巻いたもの。右端に、巻いた紙の全体を覆うように表紙を付ける。表紙の端に細い竹や木が巻き込んであり（八双）、そこに巻紐を付ける。現存する日本最古の書物『法華義疏』がそうであるように、古くからある装訂法。版本にも見られるが、経典や写本の模刻本など分野が限られる。

なお冊子本（特に袋綴本）を解体して卷子本に直したものがしばしばあるので注意。その場合は「卷子本（袋綴改装）」などのように注記する。ただし袋綴本を直した場合は、通常各紙の中央に折り目の跡が残るので、判別が容易である。

継紙 ○

卷子本と同じく紙を横に貼り継いだものであるが、表紙と軸がなく、紙を繋げただけの形態のもの。卷子本のように巻いてある場合は、「未装卷子本」あるいは「巻紙」とも言う。ただし丸く巻いていないものもあるので、一般的な名称としては「継紙」が適切である。

折本の類

折本

糊付けして横に繋げた紙を、等間隔で山と谷を交互に作って折り畳んだもの。料紙の表側だけに書写したものと、料紙の裏側にも書写したもの（両面書写の折本）がある。

本来の折本のほか、卷子本を改装した折本がしばしばあるので注意。その場合は「折本（卷子本改装）」のように注記する。

折帖 ◎

一定の大きさの厚紙を横に繋げ、継ぎ目部分で折って畳んだもの。手鑑や短冊帖などに見られる装訂。形態上は折本と似ているが、折本では料紙の継ぎ目と折り目が原則的に無関係な点で区別される。版本の例は未見。

冊子本の類

〔単葉系〕

袋綴ふくろとじ

紙を二つ折りにしたものを重ね、折り目と反対側の端を糸や紙縫こよりなどで綴じたもの（紙縫でいったん下綴じした後、更に糸で膝かがることもある）。比較的時代が下がってから現れるように説くものもあるがそれは誤りで、仏書には平安時代後期（11c）からの例がある。ただし古くは糸綴じではなく、紙縫で結び綴じなどにしたものが多い。

折紙綴おりがみとじ ○

折紙（注）を重ねて、端を糸や紙縫などで綴じたもの。帳簿類によく用いられ、「長帳綴」「横帳綴」あるいは「帳綴」と呼ばれることもあるが、一般的な名称としては「折紙綴」を用いるのが適当。連歌や俳諧の懐紙もこの装訂。版本にもあるが、八文字屋本の浮世草子や記録など、特定の種目に限られる。

（注）折紙＝一枚の紙を、折り目が下（手前側）になるように二つ折りにしたもの。

単葉装たんようそう ○

一枚の紙を重ね、端を糸や紙縫などで綴じたもの。ジャンルに関わりなく見られる。

〔双葉系〕

粘葉装でっちようそう ○

紙を二つ折りにし、外側の折り目脇の部分を糊代として、順次糊付けしたもの。しばしば「両面書写の粘葉装」と、紙を折った内側の面にだけ書写した「片面（内面）書写の粘葉装」があるように言われるが、実例はほとんど全てが両面書写である。比較的古い時代に限られるように説くものもあるがそれは誤りで、ある種の仏書（真言宗の諸尊法の柵形本など）では伝統的にこの装訂を用い、新しくは明治以降にまで及んでいる。

版本の例は、高野版や浄土真宗の和讃本など、ほぼ仏書関係に限られる。

双葉装そうようそう* ◎

紙の用い方は粘葉装と同じであるが、糊を使わず糸や紙縫などで綴じたもの。管見では天台宗や浄土真宗など仏書の例が多い。折紙を用いた「折紙双葉装おりがみそうようそう* ○」もある。双葉装の版本は未見で、折紙双葉装はごく稀に版本の例がある。

なお、糊離れのした粘葉装の本を糸で膝かがって補修したものがあり、本来の双葉装と区別する必要がある。

〔複式双葉系〕

列帖装れっちようそう ○

紙を複数枚重ねて二つ折りにしたもの（一括り・一折くく）を二つ以上並べ、糸や紐などで繋ぎ合わせたもの。各括りの折り目の部分に上下二つずつ、計4箇所おの穴を開け、糸を順次通して行く綴じ方が一般的であるが、古くは紙縫などで結び綴じにした例もある。紙の両面に書写する関係で、鳥の子や厚手の楮紙など墨が裏映りしにくい料紙を用いるのが普

通（下記の「折紙列帖装」を除く）。年代の判明する最古の遺品は元永 3 年（1120）書写の元永本『古今和歌集』であるが、それより早く11c 初め～中頃の歌集や真言宗の仏書の例がある。版本にも見られるが、一部の謡本や声明本など特定の種目にほぼ限られる。

「綴葉装」という呼び方もあるが、「葉」を「綴じる」のは粘葉装・画帖装以外の冊子本に共通の製本法で、特定の装訂の名称としてはふさわしくない。

なお、料紙に折紙を用いている場合は「折紙列帖装 ◎」^{おりがみれっちようそう}と言う（「双葉列帖装」の名称は不可）。いずれにしても列帖装の一種である。折紙列帖装の版本は未見。

単帖装* ◎^{たんじょうそう}

列帖装の一括りだけの形のもの。列帖装と異なり、折り目の部分の綴じ穴が2箇所だけのものもある。管見では仏書と歌書と謡本の例を確認している。版本の例は未見。

〔その他〕 画帖装^{がじょうそう}

紙を二つ折りにし、外側の、折り目と平行の端を糊付けして順次繋げたもの。主として、1枚で完結する絵などを集めて冊子にする場合に用いられる。あまり古い例は見ず、江戸中期以降に工夫された装訂か。版本の例が多く、そちらが先行するかも知れない。

《冊子本の装訂の体系分類案》

◇紙の使い方による分類

〔単葉系〕袋綴・折紙綴・単葉装

→ 1枚の紙が1単位で、それが1丁（1葉）になる

〔双葉系〕粘葉装・双葉装

→ 1枚の紙を二つ折りにしたものが1単位で、それが2丁（2葉）になる

〔複式双葉系〕列帖装・単帖装

→ 何枚かの紙を重ねて二つ折りにしたものが1単位で、それぞれの紙が2丁（2葉）になる

〔その他〕画帖装

→ 1枚の紙を二つ折りにしたものが1単位で、通常1枚の紙ごとに内容が完結しており、「丁（葉）」を以ては数えにくい（「紙数〇枚」が妥当か）

◇綴じ方（糸や紙縫の通し方）による分類（*は仮称）

結び綴じ

藤り綴じ*（四つ目綴じ・五つ目綴じ・康熙綴じ、ほか）

紙釘装^{してい}

背穴綴じ*

etc.

※装訂の分類基準は紙の使い方を第一にすべきで、綴じ方の違いはその下のレベル。

【紙の使い方と綴じ方の組み合わせ】（糊を用いる粘葉装・画帖装は除く）

	袋綴	折紙綴	単葉装	双葉装	列帖装	単帖装
結び綴じ	◎	◎	○	○	○	△
膝り綴じ	◎	◎	◎	◎	(△)	(△)
紙釘装	○	△	○	○	(△)	(△)
背穴綴じ	/	/	/	○	◎	◎

◎◎は実例あり。◎はその装訂において多く見られるもの。

△はあるかも知れないが実例未確認。(△)はやや考えにくいもの。

/はありえない組み合わせ。